

令和6年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立箕田小学校		NO. 1		
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題 (○:成果 ▼:課題)	今後の改善点	学校関係者評価
学力向上×ICT活用	<p>1 授業改善・授業研究</p> <ul style="list-style-type: none"> 主体的な学びを生む指導 ICTを活用した授業づくり <ul style="list-style-type: none"> →「授業で、PC・タブレットなどのICT機器を使う」週3回以上:70%以上 年2回の研究授業 全教員の研究授業の実施 <ul style="list-style-type: none"> →児童アンケートによる検証 「学校の授業がわかる」よくわかる:60%以上 →保護者アンケートによる検証 「学校は工夫した授業に努めている」よく努めている:50%以上 <p>2 基礎学力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭学習の充実(家庭学習のてびきの作成、チャレンジ学習のたよりの発行) <ul style="list-style-type: none"> →家庭学習時間の増加 平日1時間以上:60%以上 →児童アンケート「宿題をする」毎日しっかり:80%以上 →保護者アンケート「子どもの学習の様子を見る」肯定的回答:80%以上 モジュール学習の時間の有効活用 読書活動の充実 <ul style="list-style-type: none"> →図書貸出冊数児童1人年間:42冊以上 	<p>1 授業改善・授業研究 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○授業スタイルを工夫したことにより、児童の学習意欲向上につながっている。 ○年2回の研究授業だけでなく、教員が自分の授業を積極的に提案し、教員同士授業を見合って学び合い、研究することができた。 ▼「授業で、PC・タブレットなどのICT機器を使う」 <ul style="list-style-type: none"> 1・2・3年生週3回以上(R5 40% → R6 8%) 4・5・6年生週3回以上(R5 64% → R6 75%) ▼児童アンケート「学校の授業がわかる」(よくわかる:R5 46.6%→R6 55.2%) 数値は8.6%上昇したが、目標値には届かなかった。 ▼保護者アンケート「学校は工夫した授業に努めている」(よく努めている:R5 41.0% → R6 32.7%) <p>2 基礎学力の向上 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「チャレンジ学習のたより」を発行したことにより、学ぶ内容や方法が明確に伝わり、児童の意欲向上につながった。 ○どの学年も、モジュール学習時間の効果的な活用が定着している。 ○図書貸出冊数が増加した。児童1人年間:42冊以上(R5 31.4冊 → R6 39.3冊 ※12月末) ▼1日の平均家庭学習時間が増えなかった。【学調児童質問紙(6年)より】(平日1日1時間: R5 55.3% → R6 48.6%) ▼児童アンケート「宿題をする」(毎日しっかり:R5 66.0% → R6 69.7%) ▼保護者アンケート「子どもの学習の様子を見る」(肯定的回答:R5 70.2% → R6 71.5%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態に応じたICTの効果的な活用の仕方を考え、進めていく。学年に応じた活用の仕方を見直す。 ・今年度の対話を重視した取組の成果を生かしながら、「みだの話したいわ、聞きたいわ」の定着を図る。 ・授業スタイルの工夫は進んだが、さらに本校の児童の実態に合わせたよりよいスタイルを探索するため、来年度も自主的に教職員同士で授業を見合い、質の高い授業作りに向けて研究を押し進める。 ・宿題においては、児童の背景にある生活習慣や家庭状況の把握、授業でわからなかったところの把握に努めるとともに、個に応じた支援を行い、まずは「取り組んでいない」児童を0%(R6:3.5%)にすることを目標としたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を互いに見せ合い、より良い授業づくりを進めるボトムアップ型は、職員の合意形成も図りやすく、組織力向上において理想的と思えます。また、その発想は子どもたちの話し合い活動の活性化にもつながるように感じます。 ・宿題の意義を再考し、個々に応じた支援という発想は、学力に課題がある児童への対応という意味からも大切にすべきと思えます。 ・先生方の日頃からの授業の改善、研究等、様々な指導の成果は、きっと子どもたちの成長、学習意欲の向上につながっていくと信じております。 ・学習ボランティア(算数)の活用が年々減っているのが、スポット的にボランティアを考えてもらいたい。(コンパスやものさし)三角定規、分度器の利用などは、毎年困っている子どもたちが多いので。 ・各クラスの児童の特徴にあった授業内容の工夫や研究をして下さる事で、児童の学習意欲向上につながったのはすばらしい事だと感じました。 ・担任の先生がすべての授業を担当する時代ではないので、今まで以上に教科ごと担当の先生を変えてもよいと思います。
	長期欠席対策	<p>1 早期支援のための「対応」「仕組み」の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> 身体、行動に表れている登校渋りのサインのキャッチ 迅速な情報共有(担当者や管理職への報告・連絡・相談) ケース会議等の実施 スクールカウンセラーの積極的活用や外部機関との連携 <ul style="list-style-type: none"> →30日以上欠席児童数:2人以下 →児童アンケート「困った時には相談する」相談できる肯定的回答:85%以上(相談することがない回答は含まず) <p>2 新たな不登校を生まない学校づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが学校生活を「楽しい」と感じる授業や取り組みの推進 <ul style="list-style-type: none"> →児童アンケート「学校が楽しい」とても楽しい:70%以上 →保護者アンケート「子どもが友だちと良い関係を保っている」肯定的回答:90%以上 	<p>1 早期支援のための「対応」「仕組み」の確立 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○児童の欠席状況を教職員全体で共有し、見守る体制づくりができた。 ○定期的にケース会議等を開き、支援の方向性を全教職員で確認するとともに、児童の理解を深めることができた。 ○スクールカウンセラーへの相談を適宜進めることによって、保護者や児童の心の安定が図られた。 ▼30日以上欠席児童数が増えた(R5 2人 → R6 4人 ※12月末) ▼児童アンケート「困った時には相談する」(相談できる肯定的回答: R5 59.2% → R6 61.2%) 数値は上昇したが、目標値には届かなかった。 <p>2 新たな不登校を生まない学校づくり (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○児童アンケート「学校が楽しい」(とても楽しい: R5 67.5% → R6 71.6%) ○保護者アンケート「子どもが友だちと良い関係を保っている」(肯定的回答: R5 95.9% → R6 98.2%) 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の適切な支援ができるよう、支援の方向性を全教職員で確認し、引き続き組織に取組を行っていく。 ・児童や保護者が抱える心の問題について、スクールカウンセラーへの相談を進めるとともに、教職員もスクールカウンセラーからスーパーバイズを受けたり、コンサルテーションを行ったりするなど積極的な活用を図る。 ・児童が困っていることを聞き取る機会を作り出したり、児童同士でも相談できる関係づくりを進めたりするなど、相談しやすい環境を作っていく。
地域連携		<p>1 家庭・地域と協働した取組の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会を活用しながら、学校の課題について保護者・地域の方と協議する。 <ul style="list-style-type: none"> →学校運営協議会:年6回開催 学校支援ボランティア等を活用した学習活動の実施 <ul style="list-style-type: none"> →児童アンケート「地域の行事に参加している」肯定的回答:80%以上 <p>2 中学校区の学校間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 小学校・中学校間での児童生徒の情報共有 校長会、各学校の担当者が集う会議の実施 中学校の教員による小学校での出前授業の実施 小中学校教員の合同研修会や、教員の授業を参観し、授業研究を行う 児童生徒による人権フォーラムの実施 	<p>1 家庭・地域と協働した取組の推進 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学校運営協議会を年6回行い、子どもたちの学力向上や生徒指導上の課題について協議することができた。 ○地域の方やボランティアの方のご支援・ご協力のもと、2年生生活科の「校区探検」3年生社会科の「地区じまん」「地域学習:虫送り」、4年生体育科での「わくわく体験ニュースポーツ教室」等の学習活動を実施することができた。 ○学校運営協議会、まちづくり協議会、学校が連携して、見守りボランティアの情報交換会を実施することができた。 ▼児童アンケート「地域の行事に参加している」肯定的回答:80%以上 <ul style="list-style-type: none"> 1・2・3年生肯定的回答(R6 73%) 4・5・6年生肯定的回答(R6 83%) 様々な地域行事が開催され、児童も喜んで参加している様子がみられるが、低学年の参加率が低い。 <p>2 中学校区の学校間連携 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○様々な機会を通して、小学校・中学校間での児童生徒の情報共有を行うことができた。 ○各学校間での授業の参観を積極的に行うことができ、自校での実践に生かすことができた。 ○小学校・中学校・地域合同で、地震・津波避難訓練を実施することができた。 ▼児童生徒による人権フォーラムは、ややマンネリ化している傾向があるため、ねらいを再確認し、内容等の充実を図る必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登下校の見守りボランティアは、高齢化に伴い、年々参加いただく方が減少傾向にあるので、見守りを持続させていくためにも引き続き、「見守りボランティアの会」を開催しながら、募集方法や組織のあり方について協議をしていく。 ・校区の小・中学校間での情報共有を丁寧に行いながら、連携して児童生徒の課題解決に当たり、育成を図りたい。

非認知能力育成	<p>1 重点4項目(やり抜く力・自制心・自己肯定感・社会性)の育成への取組の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科学習、特別活動、学校行事、学年行事等を通して育成 ・授業での振り返りに重点項目を含め、児童自身の育成への意識向上を図る ・全校での自己肯定感を高める取組の実施 ・非認知能力育成に関する教職員研修の実施:年1回以上 <ul style="list-style-type: none"> →児童アンケート「クラスの仲間を大切にする」肯定的回答:100% →児童アンケート「誰かの役に立つことをする」肯定的回答:100% →保護者アンケート「子どものよいところを認め、ほめている」肯定的回答:90%以上 <p>2 非認知能力を育成する授業実践、生徒指導体制の確立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育的不利な環境のもとにある子どもを中心とした仲間づくり <ul style="list-style-type: none"> →授業参観で人権学習を公開し、保護者への啓発を行う →教職員による仲間づくりに関するレポート研修の実施 ・いじめのない楽しい学校づくり <ul style="list-style-type: none"> →いじめアンケート:年3回実施 ・いじめを認知した場合の迅速な対応と組織的対応 	<p>1 重点4項目(やり抜く力・自制心・自己肯定感・社会性)の育成への取組の推進 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「みんなのええとこ知ってます花」の取組を全校で行うことにより、児童の相互理解を深め、自己肯定感を高めることにつながられた。 ○異学年交流(縦割り班活動)を通して、仲間を大切にすることを高めるとともに、自制心や社会性の育成につながられた。 ○教育委員会指導主事を招聘した研修会を年4回実施した。非認知能力に関する研修だけでなく、人権教育に関する研修を実施し、教職員の実践力向上を図った。 ▼児童アンケート「クラスの仲間を大切にする」(肯定的回答: R6 99.0%) ▼児童アンケート「誰かの役に立つことをする」(肯定的回答: R5 86.9%→ R6 92.5%) ○保護者アンケート「子どものよいところを認め、ほめている」(肯定的回答: R6 98.8%) <p>2 非認知能力を育成する授業実践、生徒指導体制の確立 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○いじめをアンケート等から認知した場合には、迅速に対応等について協議し、組織的な取組に努めることができた。 ○人権教育に関する研究授業や仲間づくりに関するレポート研修を実施し、教職員の実践力向上につながることができた。 ○ピンクシャツ運動(いじめ防止運動)を実施し、児童、保護者へ啓発することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程に非認知能力育成を組み入れ、研修計画や行事計画等に位置づけていく。 ・学習活動の内容、さらには学年に応じて、日頃の授業の中でも重点4項目を振り返る活動を今年度以上に取り入れ、児童自身が自分を見つめ直し、高める機会としたい。 ・児童アンケートの数値は上昇しているため、引き続き現在の取組の充実を図る。 ・いじめアンケートを活用したり、日頃の児童観察を生かしたりしながら、教職員同士の情報交換を密に行い、児童の関係性をつかむとともに、いじめと認知した場合には、迅速かつ組織的に対応し、適切な初期対応に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・重点4項目については、子どもたちの「生き抜く力」や「人間力」の形成につながるものと思います。4項目とも大事にすべきことと感じます。 ・非認知能力の育成やいじめ問題は、目に見えてわかるものでもなく、不登校の問題同様、難しいと思います。先生方の日々の取り組み、ご努力には頭が下がります。学校だけでなく、社会全体で考えていかなければならない永遠の課題だと思います。
業務改善	<p>1 総勤務時間の縮減に向けた取り組みの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定時退校日の設定:月2日 ・時間外労働の削減:月45時間以上0人 ・会議の効率的な進行 <ul style="list-style-type: none"> →60分以内に終了:70%以上 <p>2 仕事の効率化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートや会議資料等のデータ化・共有化 ・会議・行事等の精選、業務内容の分担の適正化 ・児童の下校時刻を早めるB日課を設定し、放課後の業務時間の創出 	<p>1 総勤務時間の縮減に向けた取り組みの推進 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○定時退校日については、月2回設定し、定時退校できた人数の割合(実施率)については改善傾向だった。(実施率:R5 78.9% → R6 88.8%) ○時間外労働については、月45時間以上0人を達成することができている。 ○総勤務時間についても削減することができた。(R5 28.9時間 → R6 21.4時間 ※12月末) ○会議を効率的に進めることができた。(60分以内に終了: R5 53.6% → R6 64.8% ※12月末) <p>2 仕事の効率化 (成果と課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○職員会議等について提案資料の電子化が定着した。 ○スクール・サポート・スタッフを活用し、教職員の印刷等の業務が削減されている。 ○B日課を設定したことにより、放課後に会議や研修、教材研究のための時間を確保することができた。 ▼クラス数減少に伴い、教職員の配置も減少しているため、一人当たりの担当業務が増えており、負担感が大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・総勤務時間の削減は、改善方向へやや進んでいるが、まだまだ時間外労働時間は長いため、引き続き、業務の削減、効率化に向けて、工夫を重ねていきたい。 ・今年度からB日課を設定したことにより、児童の個別対応への時間が作り出せたこと、また教職員の会議や教材研究の時間が確保されことなど、メリットが大きかったため、来年度は月1回から2回に増やしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員が疲れ切ってしまうと、「次にこんなことを試したい。こんなことにも取り組ませたい。」と思える職場づくりが、子どもの幸せにつながる学校づくりになると思いますので、先生方が疲れ切ってしまうよう留意ください。 ・時代の流れ、変化とともに昔とは違った大変さがある教育現場だと思っています。そんな中ではありますが、先生方の元気で活気のある姿は、子どもたちにとって最良の「教え」だと思います。まずは、心身ともに気を付けていただき、子どもの目標同様、「学校が楽しい」と思えるよう過ごしてください。 ・B日課に関しては、保護者の意見も聞いたほうが良いと思う。保護者にとってのメリットはないように思えるので。 ・SSS、指導員、学習ボランティアを活用して先生方の業務削減につながるとよい。